

自分と他者に
対して

未定である
二つは
論議
に
対して
論議
に
対して
論議
に
対して

人間は実体ではないし、現象ではないか。
 全て1195あるものは現象ではないか。

人間の肉体は大宇宙の真理の体現者である。
 複雑と極めた宇宙の法則と云つ残す可
 り尽すに在る。個別的に意識するといふ
 事はないのである。全体的な完全な意識は即
 ち無意識と同じである。人間の肉体は無意識
 である。意識か否かという意味での無意識で
 はなく、肉体のもつ意識は完全な全体的で
 あるが故に無意識である。人間の肉体はま
 だ宇宙の一部であり、それはとりもな
 らず宇宙そのものである。宇宙そのものは
 自らを断片的に意識し、自覚する必要はない。
 人間の肉体は、犬や猫や、或いは一本の百
 合の花、バラの花と全く同じく、更にまた海
 辺の草とつばの山石と全く同じく、それ自体
 が宇宙の一部をなし、宇宙の一部として宇
 宙全体を貫く真理の具現者として宇宙その
 ものと何ら変らぬ。我々の肉体はすべて宇
 宙の真理を知つてゐる。である！否、真理を
 持つて人間は精神をもつ。人間は肉体と精神

とから成り立っている。勿論その両者とも
べれば人間にとつて肉体の方がより本源的
である。我等は肉体的存在として宇宙の真
理そのものとして一本の百合の花と同じく
全く安心立命の世界にあるのである。だがこ
こでややおかしいのは人間が精神的存在者で
もあるといふことである。勿論先にも述べた
ように人間にとつて肉体の方がより本源的
であつて精神はその上に生じたカビのよう
なものである。人間精神の特徴は意識にある。
全体的な意識ではなく個別の意識
にある。この断片的な個別の意識に於て我
らといふものが出てくるのである。
等質は一つ一つ人間の肉体が言語とまつ
にいたる時人間の肉体に精神が生じる。精
神といふカビがはえる。精神は言語と密接な
関連をもつ。善もなければ悪もなく、美醜の
区別もない。完全な肉体の(の)世界では意識は全体
的であり、自己の肉体も真理を把握し、他者
の肉体も真理を把握し、そこには他者の存在

し かし 精神 の み は 単 独 で は 意 味 を も た 不 可 能 だ け だ 。
 汝 等 が 二 人 以 上 集 ま る 所 に 我 は 汝 等 の
 間 に 在 る べ し 聖 句 か 意 味 一 言 一 語
 する こと は 重 要 だ け だ 。 < 聖 句 一 言 一 語 精
 神 は 神 聖 関 係
 成 り 立 っ て 在 る 。 単 独 者 の う え に 神 は 決 し
 て 現 わ れ 不 可 能 だ け だ 。 以 後 精 神 的 存 在
 と 一 人 の 人 間 を 車 に 人 間 と 言 っ て 二 人 以 上
 人 間 は 生 存 の 条 件 と 一 人 間 精 神 的 生 存 の
 意 味 だ け だ 。 以 後 一 言 一 語 二 人 以 上 不 可 能 だ け だ 。 肉
 体 的 存 在 と 一 人 間 以 上 二 人 以 上 不 可 能 だ け だ 。
 我 等 一 人 間 者 の 存 在 と 絶 對 的 存 在 条 件 と し
 て 在 る 。 自 己 と 他 者 と は 一 人 間 者 の 存 在 条 件 だ け だ 。
 己 の み の 上 に 決 し て 現 わ れ 不 可 能 だ け だ 。 神 は
 自 己 と 他 者 と の 間 に 在 る 関 係 上 に 現 わ れ
 不 可 能 だ け だ 。 何 か 一 人 間 者 と 他 者 と 区 別 可 能
 も の は 何 か 自 己 と 他 者 と 区 別 可 能 だ け だ 。
 さ だ め 不 可 能 だ け だ 。 何 か 一 人 間 者 と 他 者 と 区 別 可 能

境界が~~あ~~いまいで 自己が他者に吸収され或
 いは他者が自己に吸収されるならば~~その~~時
 両者の関係は自己と他者との関係とは言いか
 ない。自己には決して吸収され得ない他者と
 他者には決して吸収され得ない自己とかがあ
 る。はじめに自己と他者との関係が成立す
 るのである。
 自己に吸収されない他者とは 自己の言表
 の中~~で~~言い尽され~~ない~~他者という意味である
 自己が他者に~~閉~~じこめ~~る~~或る規定~~を~~観念化
 する。自己の~~内~~に他者に関する
 観念の~~内~~に消失するといふことか、その他
 者に~~と~~てあり得ないといふことである。そ
 れはまた逆に他者が勝手につくりだした或
 る観念の~~内~~に自己は決して吸収されるこ
 とはないといふ事でもある。自己と自己に
 あるが~~ら~~他者とはさういふこと~~な~~い。
 自己と他者とが~~か~~か~~り~~か~~か~~り~~な~~い状態にあるとき
 は~~い~~か~~か~~り~~な~~い。か~~か~~り~~な~~い。か~~か~~り~~な~~い。か~~か~~り~~な~~い。
 肉体が言語~~に~~よ~~り~~て意識をもた~~ら~~ず

され、その意識のありようと精神と呼び得る
が、肉体の世界は自己と他者との区別を云々
するにと意味のな「世界」である。肉体は無
限に複雑な意識を限りなく短「時間」でなしと
げてしまふ。つまり真理を体得してゐる。つ
まり真理そのもの世界のあり。肉体が言語
をもつことにより意識へ限定された普遍的
でな「それ」と生じ、精神の世界が現われた
時、自己と他者という基本的な要素が生じた
。何故なう言語そのものか。一個にあらざる
存在者間に於てのみ成立する現象であるから
である。教に於て一個ではななくてもそれら
が同じであるならは、言語現象は成り立たぬ
ではな「か」。言語を用ゐる必要はな「か」であ
る。こゝに「よ」に精神は、自己と他者という「質」
的[◎]に異[◎]な[◎]つた[◎]に一個にあらざる存在間の関係の
上に成り立つたのである。自己にあらざる他者
と、他者にあらざる自己との関係とは何であ
り、如何にして可能であり、具体的に如何な
る諸関係があり得るのであらうか。